


氏名	井上幸子
授与した学位	博士
専攻分野の名称	医学
学位授与番号	博甲第 4918 号
学位授与の日付	平成26年3月25日
学位授与の要件	医歯薬学総合研究科社会環境生命科学専攻 (学位規則第4条第1項該当)
学位論文題目	Social Cohesion and Mortality: A Survival Analysis of Older Adults in Japan (社会凝集性と死亡：日本の高齢者を対象とした生存解析の結果)
論文審査委員	教授 光延 文裕 教授 宮石 智 教授 樋之津 中郎

View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk

brought to you by  CORE

provided by Okayama University Scientific Achievement Repository

学位論文内容の要旨

健康の決定因子としての社会凝集性(Social cohesion)に関して、多くの先行研究が実施されている。本研究では、静岡で実施された65歳から85歳の高齢者を対象としたコホート調査のデータを利用し、社会凝集性と死亡の関連性について評価した。1999年の初回調査時に回答した14,001人をコホートと定義し、2002年、2006年、2009年に追跡調査を実施した。調査を完了した11,092人のうち、1,427人が追跡期間に死亡した。解析時に調整した共変量は時間依存変数として扱い、比例ハザードモデルを用いて、社会凝集性に対する認識(個人レベルおよびコミュニティレベル)と死亡の関連について、ハザード比および95%信頼区間を算出した。その結果、個人の生活習慣などの因子で調整した個人レベルの社会凝集性に対する認識が高いことは、全死因死亡(HR = 0.78; 95% CI = 0.73, 0.84)、循環器疾患による死亡(HR=0.75; 95% CI=0.67, 0.84)、肺呼吸器疾患による死亡(HR=0.66; 95% CI=0.58, 0.75)、その他の死因による死亡(HR = 0.76; 95% CI = 0.66, 0.89)のリスクを低下させることと関連していた。しかしながら、コミュニティレベルの社会凝集性と死亡では、関連性は認められなかった。日本の高齢者の間では、社会凝集性に対する個人の肯定的な認識が全死因死亡および死因別死亡の低下に関連していた。

論文審査結果の要旨

本研究は、静岡で実施された65歳から85歳の高齢者を対象としたコホート調査のデータを利用し、解析時に調整した共変量は時間依存変数として扱い、比例ハザードモデルを用いて、社会凝集性に対する認識(個人レベルおよびコミュニティレベル)と死亡の関連について検討したものである。その結果、個人の生活習慣などの因子で調整した個人レベルの社会凝集性に対する認識が高いことは、全死因死亡、循環器疾患による死亡、肺呼吸器疾患による死亡、その他の死因による死亡のリスクを低下させることと関連していることを見出した。しかし、コミュニティレベルの社会凝集性と死亡では、関連性は認められなかった。日本人高齢者において、社会凝集性に対する個人の肯定的な認知が健康に良い影響を及ぼしていることを示唆した縦断的研究として価値ある業績であると認める。

よって、本研究者は博士(医学)の学位を得る資格があると認める。